気は、正直で誠実な行動となって現れていました。南吉の文章は、その場に居合わせたかのように、人の繋がりの糸、一本一本をつむぎ出して見せてくれます。

後半、電気の普及でランプは終わりを迎えます。巳之助は、この社会の変化を受け入れられず、区長を恨み牛小屋に放火しようとします。が、すんでのところで、気が付くのです。

「古い自分のしょうばいが失われるからとて、世の中の進むのにじゃましようとしたりなんのうらみもない人をうらんで火をつけようとしたのは、男としてなんと見苦しいざまであったことか。」（引用）

そう悟った巳之助は、ありったけのランプに灯りをともして木につるし、小石を投げて割っていきます。その後、始めた本屋は息子に受け継がれ、東一君につながっていくのです。

何度読んでも、ランプを割る場面は鮮やか。夜のしじまに響く「ぱりいん」という音が聞こえてくるようです。

今回、強く感じたのは、次の二点でした。

一つ目は、人生の岐路に立たされた者に注がれる深い情愛です。近年、私たちは、巳之助のような立場に立たされることが多くなりました。社会の変化はすさまじく、次々と物もシステムも関係性も変わってきています。年代を問わず、否応なしに変化を迫られる事例をよく見聞きします。ランプに別れる巳之助の心境は、他人ごとではありません。

そうしたとき、この話はそっと教えてくれます。長い努力で得た生活の安定、人の役に立ってきたという自負、日々馴染んできた風景など、見えないもの数えられないもののぬくもりは、誰にも忘れがたく離れがたいものだと。容赦なく岐路に立たされた人の、愚かとも見える行動を笑うことはできないと諭してくれるのです。

大震災から二年余、被災地では、様々な決断が迫られていることでしょう。仕方のないことであり、必要なことであり、乗り越えなければならないのは、誰も分かっています。だからと言って、瓦礫の下になったアルバム・消えた街並みを恋しく思う気持ちを、打ち捨てられるでしょうか。それらに心を寄せていく大切さを巳之助を通して感じます。

二つ目は、人生の要には誠実さが大切で、それこそが次に繋がる力となり得ること。困難に遭遇したときほど、人のせいにしたり助けをあてにしたり、社会が悪いと後ろ向きになりがちです。それは誰にもあることで、南吉はそれを責めてはいない。恨み怒り悲しみは、人を狂わすとおじいさんに語らせています。それでもなお、ある部分はあきらめ、いなし、乗り越えてゆかねばならない。そのための儀式もまた大切だと。巳之助は自分を納得させるため、ランプを割るという鮮やかな行動にでました。振り返れば、私たちも、人生の時々に、自分なりにささやかな儀式を経